初対面からの縦断的な会話における疑問文による話題導入

方 敏

要旨

本研究は、日本人女子学生による初対面から4回目までの会話をもとに、疑問文による話題導入の頻度、話題の種類及び話題導入者の配慮表現を考察した。分析の結果、(1) 初対面から3回目までの会話では、疑問文による話題導入頻度が減少し続けるが、4回目ではわずかに増加する。(2) 疑問文によって導入された話題には「専門」「大学生活」など大学生にとって身近な話題だけでなく、プライバシーにかかわるものもある。(3) 疑問文による話題導入の配慮表現について、独話的対人発話と「疑問文＋補正表現」という2つのストラテジーが使用されることが観察された。

キーワード

縦断的な会話、疑問文、話題導入、話題の種類、配慮表現

Abstract

This study explores face-to-face interactions among Japanese female university students, from the first encounter to their fourth conversation. The frequency of topic initiation with interrogative sentences, types of topics, and discourse politeness of topic introducers are examined. The main results are as follows: (1) The frequency of topic initiation with interrogative sentences decreases from the first to the third conversation, but tends to increase slightly in the fourth conversation. (2) The topics initiated with interrogative sentences are not only topics familiar to university students, such as "major" and "university life," but also those related to privacy. (3) It is observed that two strategies, soliloquizing and "interrogative sentence followed by corrected expression," are used for discourse politeness.

Key words

longitudinal conversations, interrogative sentences, topic initiation, types of topics, discourse politeness

Topic Initiation with Interrogative Sentences in Longitudinal Conversations since First Encounter

Fang Min

1 はじめに

日本語学習者が日本人と良い人間関係を構築するためには、話題を導入し、展開して、終了する談話能力が必要とされる（中井2003）。自然な話題導入は会話を円滑に進行させ、コミュニケーションを取る上で大切である。話題導入の形式は話題を投げかける情報要求と自ら話題を語りかける情報提供に分けられる。情報要求と情報提供はそれぞれ疑問文と平叙文によって実現される（安達1999）。初対面や親しくない人とのコミュニケーションでは、背景知識が限られているため、会話参加者は常に疑問文を用いて話題を導入し、会話を進行させる。疑問文による導入は、平叙文を用いた話題導入と異なり、相手に興味を示す一方で、回答を強いる行為であるため、相手に対する配慮が必要とされる。特に、初対面や親しくない相手に対しては、より一層の配慮が必要である。しかし、従来の話題導入に関する先行研究のほとんどは初対面を対象にしたものであり、初対面以降の会話に注目したものは管見の限り見当たらないため、人間関係構築初期の疑問文による話題導入の実態は未解明だと言える。日本語教育の中で、学習者に適切な話題導入の仕方を指導するには、まず日本語母語話者による話題導入の実態を明らかにする必要がある。そこで、本研究では疑問文による話題導入に焦点を当て、日本語母語話者同士の初対面から4回目までの会話データを用い、会話回数の増加に伴う疑問文による話題導入の頻度や導入実態の変化を明らかにする。

2 先行研究と本研究の位置づけ

近年では、「何について」「どのように話すのか」という話題に関する研究が注目を集めている。まず、「何について話すのか」については、母語場面や接触場面の会話における話題選択・話題回避がよく論じられてきた。日本人大学生の初対面会話では、「大学生活」「所属」「居住」などの話題が選択されやすく、「政治」「宗教」「恋愛」などの話題が回避されるということが明らかになっている（三牧1999, 全2009）。

次に、「どのように話すのか」については、話題導入、話題展開、話題終結といった様々な観点から研究されている。特に、話題導入については、導入頻度と形式、導入の言語表現、導入のプロセスなどの研究が多い。しかし、話題内容と話題導入との関連に言及するものは管見の限り、宇佐美・嶺田（1995）、中井（2003）しかない。

宇佐美・嶺田（1995）は初対面会話の冒頭の3分間を対象にし、質問による話題導入が多く、その内容は相手の職業や生活環境など当たり障りのない情報を求めるものであると指摘している。また、中井（2003）は15分間の会話の中で、質問を用いた話題導入に注目し、日本語母語話者同士会話では「居住」「出身」「大学生活」などの話題が質問表現によって開始される傾向があるとしている。

さらに、話題導入者の配慮行動に注目した研究も少なく、その代表的なものとして、増田（2006）が挙げられる。増田（2006）によると、質問は相手に強力に働きかける行為であると同時に相手の応答があって初めて成立するという二面性があると指摘しており、新規話題を開始する質問ターン内の付加要素を対象に、質問を用いた働きかけのストラテジーを考察した。

上述してきたように、これまでの研究では、話題内容と話題導入についてそれぞれ論じられているが、両者のつながりに言及したものや話題導入者の配慮行動に注目したものは少ない。しかも、上述の先行研究は主に初対面会話を対象にしたものであり、人間関係構築初期の話題導入の実態には言及されていない。特に2回目以降の知り合い同士の会話では、疑問文による話題導入の頻度がどのように変わるのか、疑問文を用いてどのような話題が導入されるのか、どのような配慮表現が行われるのかは未解明であると言える。

そこで、本研究は初対面から4回にわたる日本人女子学生同士の会話をもとに、人間関係構築初期の疑問文による話題導入の実態を解明する。以下の3つの研究課題を設けて、分析を行う。

（1）会話の回ごとの疑問文による話題導入の頻度の変化を明らかにする。
（2）会話の回ごとの疑問文により導入された話題の種類を明らかにする。
（3）話題導入者の配慮表現に着目し、どのような配慮表現がどのような状況で用いられるのかを解明する。

3 分析の方法

3.1 会話資料の概要

調査は、2018年11月から2019年8月にわたって行い、日中のある大学でそれぞれ同国人女性同士の、同学年と異学年の各5組、計20組の二者間の初対面から4回目までの会話を録画・録音した。本研究は、学年差による話題選択や話題導入への影響を考慮し、同学年の日本語母語話者同士の会話を利用した。具体的には20代前半の大学（院）生9名を2人ずつ5組に分けて、週に1回の頻度で、初対面から4回目までの会話を収録した。そこから計20件、459分の会話資料を収集し、文字化した。会話参加者の情報は表1のとおりである。なお、会話参加者OAはS1とS3の2組の会話実験に参加している[注1]。会話実験は図書館のセミナー室で行い、話題は設定せず、20分間自由に話すように指示した。また話題導入や展開への影響を最小限にするために、研究目的は明らかにしていない。毎回の会話収録後、会話の自然さなどについて、アンケートとインタビューを行った。その結果、会話参加者は録画・録音に影響されず、自然に話せたことなどが確認できた。

表1　会話参加者の概要

ペア番号	名前（仮名）	学年	ペア番号	名前（仮名）	学年	ペア番号	名前（仮名）	学年
S1	KI	修士2年	S3	AB	修士2年	S5	OS	学部3年
	OA	修士2年		OA	修士2年		HR	学部3年
S2	OK	学部3年	S4	SR	学部4年			
	HS	学部3年		KR	学部4年			

3.2 話題区分と話題導入について

話題については、多くの研究者が様々な定義付けを行っているが、本研究では三牧（1999）を参考にして、話題は「会話参加者の相互行為により会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する情報のまとまり」と定義した。本研究では話題を分析単位とするため、話題を区切った。話題区分の認定は、原則として話題の内容面に注目して行った。それに加えて大谷（2018）を参考にして、話題転換のストラテジーを手がかりにした。話題導入は1つの話題が始まる発端となった発話と捉える。さらに、話題の変更、以前の話題へ戻るなどのきっかけとなる発話を全て「話題導入」として扱う。話題導入発話の認定については、全ての発話を話題導入発話と話題導入以外の発話に分類し、コーディングした。話題区分にあたって、主観的な判断にならないように、筆者と話題区分協力者は独自に5組による4回にわたる計20の会話の話題をコーディングした。作業の信頼性を判断するために、コーディングした20の会話の7分の1に当たる3つの会話を取り出し、筆者と協力者の評定者間信頼性係数（カッパ係数）を測った。カッパ係数が0.7以上の場合は、信頼性があるとされている（Bakeman & Gottman 1986）。本研究の話題区分の一致率は0.87であり、話題区分の信頼性が確保されたと言える。なお一致していなかった箇所については、談話分析に詳しい第三者の意見を参考にして、筆者が決定した。

3.3 話題の種類

話題の種類は、三牧（1999）を参考にして名付ける。なお三牧（1999）で言及されていないものの命名は、本研究で独自に行う。さらに会話の中で内容的な関連性から抽出された話題をカテゴリー化する。紙幅の都合上、話題カテゴリーのみ取り上げる。

3.4 疑問文の定義について

本節では機能と形式から疑問文を定義する。まず日本語記述文法研究会（2003: 21）は、疑問文を「命題に対して話し手の判断が成り立たないこと」を表すものと定義しており、疑問文の中心的な機能は質問であると指摘し、質問には2つの性質があると説明している。1つは「話し手に不明な情報があるため判断が成り立たない」という不確定性条件である。もう1つは「聞き手に問いかけることによって疑問の解消を目指す」という問いかけ性条件である。ただし、疑問文には質問の機能にとどまらず、上述した2つの条件のどちらかが

欠けているものもある。不確定性条件が欠けている場合は、確認要求の疑問文になり、問いかけ性条件が欠けている場合は疑いの疑問文になる。

このように、厳密な意味での疑問文は全てが相手に情報を要求する質問表現というわけではないため、本研究では疑問文という呼び方で、知らない情報を求める質問表現だけでなく、確認要求発話や、疑いを表明する発話も研究対象とする。

次に、疑問文の形式について、中井（2003: 40）に倣い、以下の8つの形式の要素のうち、1つ以上持つものは疑問文とする。なお、自然会話では終助詞「の」が疑問文とよく共起するため、1つ目の形式要素に「〜の?」「〜のか?」を追加した。

1. 「〜か?」「〜の?」「〜のか?」（発話＋終助詞「か」「の」「のか」＋上昇イントネーション）
2. 「〜ね?」「〜な?」（発話＋終助詞「ね」「な」＋上昇イントネーション）
3. 「〜かしら」「〜かな（あ）」（発話＋終助詞「かしら」「〜かな（あ）」＋下降イントネーション）
4. 「〜でしょう／だろう?」（発話＋「〜でしょう」＋上昇イントネーション）
5. 疑問詞＋「〜でしょう／だろう?」＋下降イントネーション
6. 文中に疑問詞を用いる
7. 文末上昇イントネーション
8. 言い差しの文で、文末が平坦なイントネーション（中井2003: 40一部修正）

本研究では疑問文を認定するにあたって、疑問文の機能と形式に着目し、機能と形式的要素を全て満たすものは疑問文とみなす。

3.5 話題導入者による配慮表現

疑問文には相手に回答を要求する働きかけが高いため、その働きかけを弱めるために、話題導入者は配慮表現を使用する。本研究では、配慮表現の出現位置により、導入発話前、導入発話、導入発話後に分ける。導入発話前の配慮表現は「話は変わるけど」「そういえば」「全然関係ないけど」のような話題導入を予告する機能を持つ話題転換表現を指す。話題転換表現は新規話題導入を予告する機能のほかに、相手に対する配慮の機能を併せ持つ（木暮2002）。ただし、疑問文だけでなく、平叙文によって話題を導入する際にもよく使用される。本研究は疑問文を用いた話題導入者の配慮表現を解明するものであるため、導入発話前の配慮表現は研究対象外とする。導入発話の配慮表現は、疑問文の問いかけ性を和らげることで相手に配慮を示すものである。導入発話後の配慮表現は、話題導入発話を産出してから、何らかの補正表現により相手に配慮するものである。

4 分析の結果と考察

4.1 回ごとの疑問文による話題導入の頻度

会話の回ごとの全話題数と疑問文による話題導入の頻度と割合を以下の表2にまとめる。この表から分かる通り、初対面と比べ、2回目では話題導入頻度が下がるが、2回目から4回目までの話題導入頻度は微増減している。疑問文による話題導入頻度と割合について、基本的に、回数の増加とともに、下がっていく傾向が見られるが、4回目は、3回目と比べ、少し上がったことが確認できた。

表2 回ごとの疑問文による話題導入形式の割合

	全話題数	疑問文による導入の頻度と割合
初対面	59	43（73%）
2回目	38	18（47%）
3回目	35	12（34%）
4回目	38	15（39%）

まず、回数の増加に伴う話題数の変化について、考察する。初対面会話では、会話参加者は、相手に対する知識が欠如しており、相手の領域にあまり踏み込まないように配慮しなければならないため、1つ1つの話題を掘り下げることなく、短いやり取りで行う。したがって、話題が常に変わっていき、話題数が

多い。2回目以降の会話では、会話参加者の共有する知識が増え、1つの話題を深掘りすることで、話題のやり取りが長く続くため、初対面会話と比べると、話題数が減少する。

次に、疑問文による話題導入頻度と割合の変化を分析する。初対面会話では疑問文により相手の情報を引き出し、共通の事柄を探り、会話を進行させることが多い（宇佐美・嶺田1995）ため、疑問文の使用の頻度と割合が多い。2回目以降では、話題のきっかけを作る情報が多く収集され、相互に共通して興味を持つ話題が分かるため、疑問文による話題導入頻度と割合が低くなる。

4.2 話題導入形式と話題種類

回ごとの疑問文によって導入された話題種類について、以下の表3にまとめる。毎回導入された話題を下線で、プライバシーにかかわる話題を太字に示している。プライバシーに関わる話題を認定するにあたっては、三牧（1999）と全（2009）を参考にしている。三牧（1999）による共通性が高い「大学生活」「所属」「居住」など8つの話題カテゴリーに当てはまらないものを抽出した上で、全（2009）の意識調査で挙げられるプライバシーに関わる話題項目リストに含まれているかどうかを確認している。本研究の会話で選択された「金銭」「恋愛」「外見」「家族」「宗教」という5つの話題はプライバシーにかかわるものと判断した。そのうち、「外見」「金銭」「恋愛」は疑問文により導入されたことが観察された。

表3　回ごとの疑問文による導入された話題種類

	話題種類
初対面	<u>共通点、大学生活、飲食、好み</u>、専門、所属、進路、出身、居住、名前、ハプニング
2回目	<u>共通点、大学生活、飲食、好み</u>、中学校・高校生活、出身、居住、**外見**、**金銭**、風邪、忘れること
3回目	<u>共通点、大学生活、飲食、好み</u>、専門、受験、**外見**、**恋愛**
4回目	<u>共通点、大学生活、飲食、好み</u>、専門、**恋愛**、**外見**、中学校・高校生活

表3の下線で示した「共通点」、「大学生活」、「飲食」、「好み」の4つの話題は毎回疑問文により導入されている。また2回目以降ではプライバシーにかかわる「外見」、「金銭」、「恋愛」も取り上げられている。そのうち、「外見」の話題は2回目以降の会話で何度も選択されている。奥山（2005）は、質問による話題導入は相手への関心を表す役割を果たし、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの1つであるとしている。「大学生活」「好み」など会話参加者にとって身近な話題を疑問文により導入することで、互いの興味や共通点を探り合うことができ、会話を盛り上げやすい。また、相手の服装、髪型といった外見について、疑問文を用いて聞くことで、聞き手に対する関心を表し、相手との距離を縮めようという心理を示すことができる。そして、「恋愛」については自己に関する情報の中で最もプライベートなもの（三牧2016）であるため、回避される傾向にあり、会話協力者の5組のうち、1組でしか取り上げられていない。以下に示す例1では、1行目でKIが疑問文を用いて恋人有無の話題を導入する。そして、OAが直後に返答せず（2行目）、10行目から最小の応答をする。続いて16行目、19行目でKIが繰り返し応答要求をするが、OAは応答を保留したり（17、18行目）、最小の応答をしたりする（20行目）。会話例1のKIとOAの相互行為からみれば、恋愛の話題は自ら開示しがたく、疑問文で導入、展開される可能性が高いことを示唆している。

例1　「恋愛」の会話例

1　KI　：あ恋-恋人とかっていたり[す(h)る(h)ん(h)で(h)す(h)かhhhhh
2　OA：　　[hhhhhhhhh
3　KI　：い(h)や(h)あ(h)のhhhh
（6行中略）
10　OA：[い(h)まhhhhhh
11　KI　：[あのhhh関係
12　(.)
13　OA：す
14　KI　：あほんと
15　OA：[はい
16　KI　：[あのさ関係なく,え同じ(.)境遇の人?
17　(.)
18　OA：ど(h)う(h)い(h)う(h)こ(h)と(h)聞かれるか[ちょっと境遇
19　KI　：　　[いや(h)修士とかやってる?
20　OA：あ全然＝

4.3 疑問文による話題導入の配慮表現

4.3.1 発話時の配慮表現

疑問文を用いて、相手に情報を求める際に、質問された相手は回答する義務を押し付けられるため、場合によっては回答に対して抵抗感を抱くことがある。よって、相手への問いかけを薄め、単なる話し手の自問のような形の疑問文を用いて、相手に配慮を示すことができる。

下記の会話例2と会話例3ではいずれも「疑問詞＋Vよう」の形で自分の問題を相手に提示する独話である。ただし、形式上は独話であるが、二者間会話のため、全く相手を意識しない純粋な独話とは異なる。本研究は吉野（2016）を援用し、「独話的対人発話」と呼ぶ。普通の疑問文の場合、相手に回答する義務を付加するが、独話的対人発話を用いて問いかける場合、自分に対して言うような形のため、疑問に返答するかどうかは聞き手に委ねられる。したがって独話的対人発話により話題導入がされたら、聞き手は何も返答せず聞き流しても構わない。

会話例2の直前では引っ越しについて情報交換がなされている。2秒の沈黙をおいて、1行目でABは「いや私引っ越すことになったら,どうしよう」と産出し、博士課程の入学試験に落ちることを心配している。「どうしよう」という問題提示により「受験」という話題が導入されるが、OAの回答を明示的には要求していない。OAも2行目で笑うのみで問題に回答していない。続いてABは「面倒臭いな」「[引っ越しは」（4行目、6行目）とマイナスの感情を表している。7行目でOAが「えそれ面倒くさくない?(.)い,あでもそっか,結果分かるのは3月?」と入試の合格発表日を尋ねる。

例2　独話的対人発話に対する聞き手の消極的な反応を示す会話例

1　AB：いや私引っ越すことになったら,どうしよう
2　OA：hh[hhhh
3　AB：　[hhhh
4　AB：面倒臭いな
5　OA：[う:ん:
6　AB：[引っ越しは
7　OA：えそれ面倒くさくない?(.)い,あでもそっか,結果分かるのは3月?
8　AB：うんうん

一方、会話例3のように、聞き手が独話的対人発話に対して、積極的に関与するものがある。会話例3では、KIは会話の冒頭部で「もう本当大炎上なんだけど,ど(h)う(h)し(h)よ(h)うh」（1行目）といきなり話題を導入する。それでOAは「なんで,指導教官と↑」（2行目）とKIの「大炎上」となるきっかけを推測しながら尋ねる。続いて3行目～6行目でKIが冗談めかして指導教官の愚痴を言い、8行目で「なんか指導ないんだよねな(h)ん(h)かhh[hhhhhh」と結論をつける。そして10行目でOAは「えっそれ指(h)導(h)教(h)官じゃないじゃ＝」と二重否定疑問文の形でKIの境遇を理解し、共感を示す。

例3　独話的対人発話に対する聞き手の積極的な反応を示す会話例

1　KI　：hhhhもう本当大炎上なんだけど,ど(h)う(h)し(h)よ(h)うh
2　OA：なんで,指導教官と↑
3　KI　：いや指導教官(.)が機能してなくてh
4　OA：hh[hhhhhhh
5　KI　：　[hhhhhな(h)ん(h)か(h)一年半ぐらい前にもう死んだものと思って
6　　hhhh[なんだけど
7　OA：　[え(1.0)どういうこと?
8　KI　：なんか指導ないんだよねな(h)ん(h)かhh[hhhhhh
9　OA：　[hhhhh
10　OA：えっそれ指(h)導(h)教(h)官じゃないじゃ＝

上述の独話的対人発話による話題導入は初対面会話では観察されず、いずれも3回目で導入されたものである。初対面会話で使用されなかった一因として、独話の性質に関係があると考えられる。筒井（2012: 236）によると、独話的対人発話は「単に事実を述べているのではなく、何らかの感慨や気分などを表している」という。上述の会話例2と会話例3では、話題導入者は「どうしよう」と産出することで、今抱えている問題を提示すると同時に、受験に受かる自信がないと不安な気持ちを表したり（会話例2）、指導教官がしっかり指導し

てくれないという不満を吐き出したり（会話例3）する。初対面会話では背景知識が共有されていないため、基本情報の交換が中心になる。よって、このような話し手の気持ちや考えなど内面的な問題を表す独話的対人発話を用いた話題導入は初対面会話では出にくい。

4.3.2 導入発話後の配慮表現

疑問文による情報要求行為は相手に関心を示すポジティブ・フェイスを満たすと同時に相手の領域に踏み込むネガティブ・フェイスを侵害する恐れがある。そのため、話題導入者は、疑問文による話題を導入した後、何らかの補正表現を用いて、相手に配慮することが観察された。

下記の会話例4の直前では、OAとABは進路について情報交換を行っていた。2秒の沈黙をおいて、1行目でOAは「なんか留学経験とか(.)ある?」と聞いて、新規話題を導入する。話題導入の唐突さを軽減するため、OAが疑問文の後、「勝手にありそうっていや思(h)って(h)る(h)だ(h)けh」と追加している。続いて9行目～11行目で「留学」という話題を導入した根拠を示している。14行目でABはOAの1行目の質問に応じて、留学経験を語っている。

例4　話題導入後の補正表現を付加する会話例

1　OA：なんか留学経験とか(.)ある?勝手にありそうっていや思(h)って(h)
2　　る(h)だ(h)けh
3　AB：いやなんかよくなんか私日本語が変だからいろんな人に言われた
4　OA：hhhh
5　(1.0)
6　AB：なんか日本人には日本語喋るとなんかどこからの国の人[ですか
7　OA：　　[hhhhhh
8　　hhhh
9　OA：なんか専攻聞いてもうすごいなんかこうグロ-グローバルいろんな(.)
10　　なんか国の人とか国に行ったり交流してるかなとかって勝手に思っ
11　　て[しまった
12　AB：　[うんうんうん
13　(1.0)
14　AB：高校の時に1年アメリカ[（　）大学で1年アメリカ

このように、疑問文を用いて話題を導入する場合、話題導入の唐突さを軽減するために、導入者は話題を導入した後、補正表現をつけることで、相手に配慮する。ただし、補正表現は話題導入後、必ず現れるわけではない。三牧(1999)は初対面会話の話題選択ストラテジーとして、直前の発話の取り立て、基本情報交換期で得た情報、選択肢リストを取り上げている。また、新規話題が直前の文脈と関連のない際には、基本情報交換期に得た情報や、初対面会話の話題選択スキーマである話題選択肢リストから話題を選択することができると指摘している。上に示した会話例4で言えば、「留学」の話題は先行話題と関連のないものである。それに加えて、基本情報交換期に獲得した情報でもなく、話題選択肢リストのものでもない。これらを話題化すると、不成功のリスクが高い（三牧1999）。しかし、先行話題が終了し、だれも次の発話順番を取らず、沈黙が生じてしまうと、会話が止まる恐れがあるため、新たな話題を取り上げなければならない。よって、話題導入者は相手に情報を要求するにあたって、補正表現を用いて、話題導入の唐突さを緩和しようとするのである。

5 おわりに

以上、同学年の日本人女子学生の初対面から4回目までの会話をもとに、疑問文による話題導入の実態を考察した。その結果、次のことが分かった。

（1）話題導入頻度は、初対面と2回目を比べると急激に落ちた。また、2回目から4回目までの変動幅は少なかった。疑問文による話題導入の頻度と割合は、初対面から3回目まででは、減少し続けたが、4回目では、わずかに増加した。

（2）疑問文を用いて、導入された話題の種類について、「共通点」「大学生活」「飲食」「好み」は毎回取り上げられている。そして、2回目以降ではプライバシーにかかわる「外見」「金銭」「恋愛」が観察された。

（3）疑問文による話題導入の配慮表現について、独話的対人発話と「疑問文＋補正表現」という2つのストラテジーが使用される。両者はいずれも疑問文が持つ相手への働きかけを和らげ、話題導入の唐突さを軽減

する機能を持つ。前者は独話の内面性の関係で初対面会話では使用されないが、後者は、先行話題と関連のない新規話題を導入する際に用いられる。

本研究の結果は、親しくない相手との会話では、疑問文によりどのような事柄が話題として導入されるのか、また、疑問文による働きかけを弱めるためにどのような配慮表現が用いられるのか、という問題について、示唆を与えると考える。ただし、話題導入は、疑問文だけでなく、平叙文によっても行われている。平叙文による話題導入の場合、どのような話題の種類があるのか、どのように相手に配慮を示すのかも分析する必要がある。これらについては、今後の分析で明らかにしたい。

〈筑波大学大学院生〉

注

［注1］…… OAが参加している2組では、話題導入の頻度や疑問文ではじまる話題の出現割合はばらつきがある。1組では、対話相手はどんどん話題を導入するが、もう1組では、OAの話題導入数が圧倒的に多い。

参考文献

安達太郎（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
宇佐美まゆみ・嶺田明美（1995）「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン―初対面二者間の会話分析より」『日本語学・日本語教育論集』2, pp.130–145.　名古屋学院大学留学生別科
大谷麻美（2018）「日・英語の初対面会話における話題の連鎖と展開―共-選択の観点からの分析」『社会言語科学』21(1), pp.96–112.　社会言語科学会
奥山洋子（2005）「話題導入における日韓のポライトネス・ストラテジー比較―日本と韓国の大学生初対面会話資料を中心に」『社会言語科学』8(1), pp.69–81.　社会言語科学会
木暮律子（2002）「日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について」『第二言語としての日本語習得研究』5, pp.5–23.　第二言語習得研究会
全鍾美（2009）「初対面場面における話題回避に関する質問紙調査―日本と韓国の大学（院）生を対象に」『言葉と文化』10, pp.95–111.　名古屋大学大学院国際言語文化研究科
筒井佐代（2012）『雑談の構造分析』くろしお出版
中井陽子（2003）「話題開始部で用いられる質問表現―日本語母語話者同士および母語話者／非母語話者による会話をもとに」『早稲田大学日本語教育研究』2, pp.37–54.　早稲田大学大学院日本語教育研究科
日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法4　第8部モダリティ』くろしお出版
増田将伸（2006）「質問を用いた働きかけのストラテジー―質問の二面性の反映として」『待遇コミュニケーション研究』4, pp.49–63.　待遇コミュニケーション学会
三牧陽子（1999）「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー―大学生会話の分析」『日本語教育』103, pp.49–58.　日本語教育学会
三牧陽子（2016）「初対面接触場面における話題管理―接触経験豊富な社会人データをもとに」三牧陽子・村岡貴子・義永美央子・西口光一・大谷晋也（編）『インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践』pp.3–20.　くろしお出版
吉野和美（2016）「独話的対人発話の研究―ポライトネスの観点から」『日本語コミュニケーション研究論集』5, pp.51–60.　日本語コミュニケーション研究会
Bakeman, R. & Gottman, J. M. (1986) *Observing Interaction: An Introduction to Sequential Analysis.* Cambridge: Cambridge University Press.

トランスクリプト内の記号

[	発話の重なりの開始	（）	聞き取り不可能の箇所
(.)	短いポーズ	:	音の延長
（数字）	沈黙の長さ（秒単位）	h	呼気音を表す
言（h）	笑いながら発話	?	語尾の音が上がっている
↑	音調の極端な上がり	＝	発話が途切れなく密着している
＜ ＞	発話のスピードが目立って遅くなる	,	音が少し下がって続きがある
∘∘	音が小さい箇所		